

「ありがとうございました」のイントネーションと「心から感謝されている気持ち」の関係： 合成音声による聴取実験結果

郡 史郎（近畿音声言語研究会発表資料：1 feb 2014, ver. 2, 2014年5月補足）

●調査の目的

巷ではさまざまなイントネーションでの「ありがとうございました」が聞かれる。そのイントネーションの変異形は「ございました」区間のアクセント実現度の大小、それと連動した形で「ありがとう」区間のアクセント実現度の大小、そして末尾の「た」を強調型上昇調（高調）で言うかどうか（「た」への疑問型上昇調や上昇下降調の使用は少ないか）、そして、「た」を長く伸ばすか、短く切るかが主であるように思われる。

商店や飲食店では、「ございました」区間を際だたせ、「た」を強調型上昇調にする言い方がよく聞かれるが、そうした言い方は、感謝の気持ちをあらわすというよりも、あいさつとして何か音を発し客に聞かせることがまず重要なのもかもしれないと思わせるものになっていて、感謝感はあまり感じられないように思える。

イントネーション研究の立場から筆者が気になるのは、(1) 感謝感とイントネーションにはどのような対応関係があるのか、そして(2) なぜ商店や飲食店では上述のような音声的変異形を人は使おうとするのか（なぜ「ございました」区間を際だたせる形で言うのか、そしてなぜ強調型上昇調なのか）、である。

関連して、Fujito, Y., E. Nakano and C. Seton (1979) "Japanese pronunciation guide for English speakers." Tokyo : Bonjinsha が、「ございました」区間を際だたせる発音は感謝の気持ちが低く、皮肉の意味になりうる旨を述べている(p.114)。この点については地域差があるかもしれず（あるいは世代差？）、少なくとも近畿地方では極端に際だたせない限り許容度は高く、皮肉の意味にはなりにくいように筆者には思われる。

ここでは、問(1)への直接的回答を得るために、そして問(2)の答えへの手がかりを得るために、商店や飲食店での形式的なあいさつとしてではなく、知人に感謝される状況に限定して、感謝感とイントネーション（と末尾母音長）の関係を PSOLA 合成音声を用いた聴取実験を通じて探った。ただし、回答者は主に近畿の大学生である。

PSOLA 合成に使った元音声は、神奈川県を主な生育地とする話者に、感謝するつもりで「ありがとうございました」と発音するよう指示して得られた発話である。感謝する相手のごく近くで言う感じではなく、2-3m 程度離れたところから比較的良好に声を張って言っている感じがするものである。

●イントネーション（と末尾母音の長さ）の注目点 計 38 音

☒参照

①「ございました」の音形

三角形状（ゴからマにかけて連続的に上昇）か、台形状（ゴ「ザイマ」シタというアクセントに対して通常実現される音形）か。なお、元音声は三角形状である。

②「ございました」の際だち

3st step：元音声の「ありがとう」より+3st, 0st, -3st, -6st, -9st（-9stは平坦）。

③「ありがとう」の際だち

3st step：元音声のまま、元音声より 3st 低い・6st 低い。

「た」の母音長 200msec についてののみ。

④末尾の「た」の動き

(1) 下降, (2) 母音始点での高さは(1)と同じだが, そのまま平坦, (3) (2)より 1.5st 高く平坦。ただし, 平坦といっても-2.5st/secの傾斜を付けている。

※(2)(3)は「強調型上昇調」~~（高調）~~

⑤末尾の「た」の母音長

短めの 100msec か, 長めの 200msec（元音声は 150msec）。

●質問

自分の知り合いにこういうふうに言われたら,
心から感謝されている気持ちがしますか。

●回答者

大学1・2年生, 計23名。

多くは近畿地方生育, その他もほとんどは西日本。

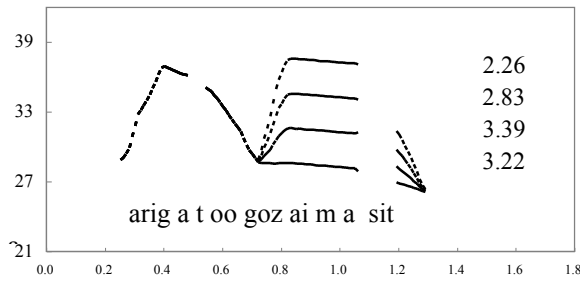
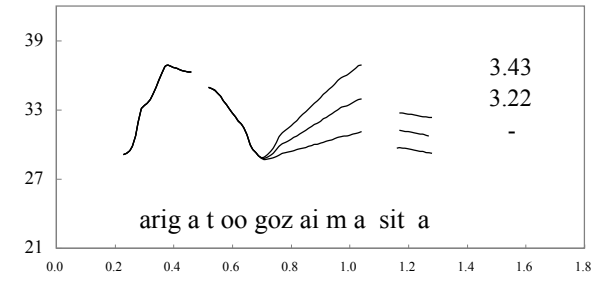
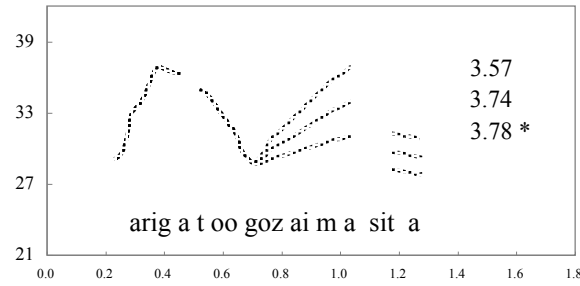
★2014年5月補足：首都圏生育の回答者25名（主に学生）による
判断もここに示すものとほぼ同じだった。

●回答方法

配布されたCDを回答者が個別に聞く。収録された音を2回続けて聞いてから, 心から感謝されている気持ちが「全然しない」「ほとんどしない」「するともしないとも言えない」「少しする」「強くする」の5段階から選択。

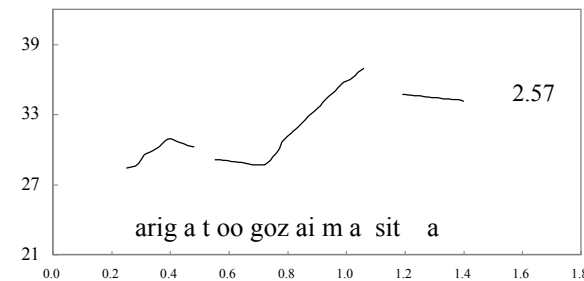
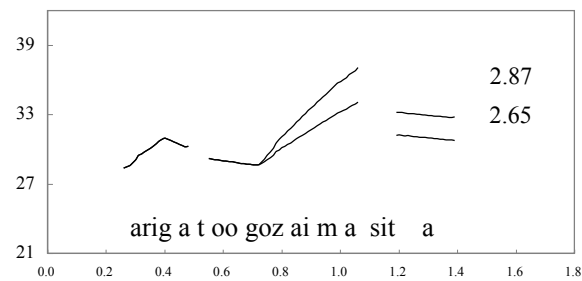
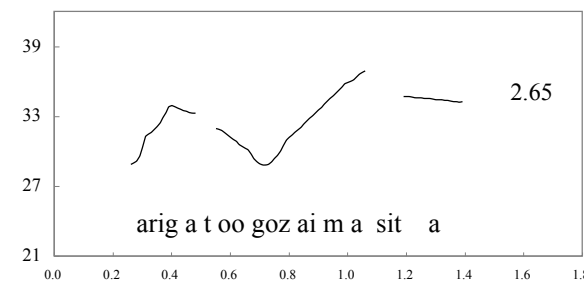
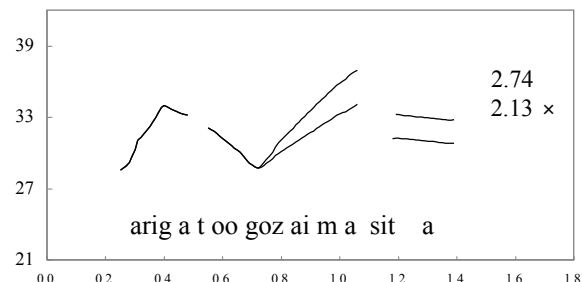
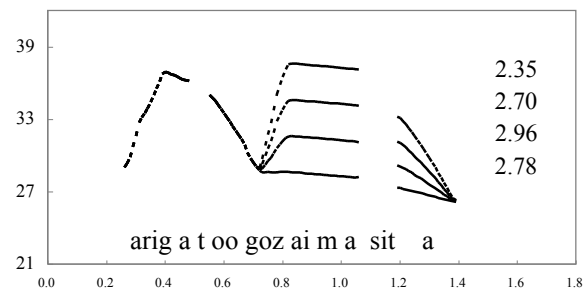
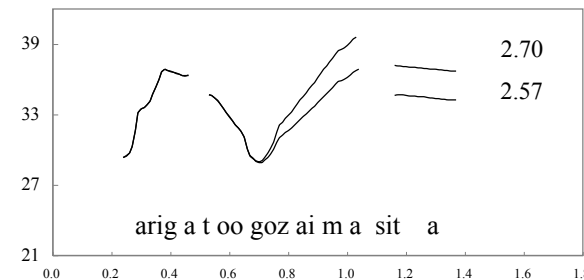
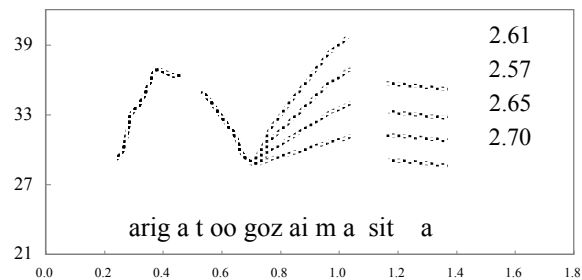
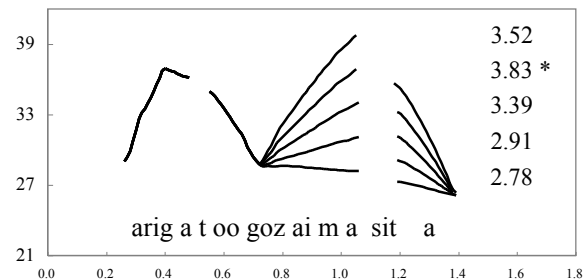
心から感謝されている気持ち（1～5の5段階評価の平均値と有意性）

文末母音：100msec



心から感謝されている気持ち (1~5の5段階評価の平均値と有意性)

文末母音 : 200msec



●結果 図に平均値と統計的有意性(*)を示す。有意性は、心から感謝されている気持ちが「少し」以上するか「ほとんどしない」以下かを符号検定した結果にもとづき、有意差調整して全体としての危険率を $p=0.05$ にしたときに有意となるもの。

①「ございました」の音形

感謝されている気持ち(感謝感)は、三角形の方が台形状より大きい。

②「ございました」の際だち

「た」が短く、下降する場合は、元音声の「ありがとう」と同じ(かなり際だちあり)か、3~6st 低いあたりがよい。「た」が長めで、下降する場合は、元音声の「ありがとう」と同じあたり(かなり際だちあり)がよい。

③「ありがとう」の際だち

元音声より低いものは、低くないものと同程度の感謝感か、むしろやや下がる傾向(けっして感謝感は上がらない)

④最後の「た」の動き

いったん下がって平坦なものや、それより 1.5st 高く平坦なものは、下降に比べて感謝感が小さい

⑤最後の「た」の母音長

やや長めの 200msec は短めの 100msec に比べて感謝感は小さくなる

●結論 (2014年5月補足: 首都圏生育回答者25名の判断もこれとほぼ同じ)

(近畿の学生にとって) 感謝の気持ちを感じさせる「ありがとうございました」は

- ・「ございました」の音形をゴからマにかけて連続的に上昇(三角形)させる。
- ・「ございました」の高さはさほど大きな影響を及ぼさない。ただ、上げすぎたり抑えすぎるとよくない。ふつうの「ありがとう」の山と同程度か、その 1/3 程度まで。
- ・「ありがとう」はふつうのままでよく、高さを抑えても効果はない。
- ・「た」は少し長くしても(200msec では) 感謝感を大きくする効果はない。
- ・「た」を「強調型上昇調(段状上昇調)」にすると逆効果。
- ・要するに、「ございました」をマにピークが来るようにして、その高さは上げすぎず抑えすぎず言えばよい。商店等でよく聞くような「ありがとう」を抑えたり、文末の「た」に特別な調子を付けるものは、知人間で感謝感を出すには逆効果。